

伝慈鎮筆『金葉和歌集』1帖



江戸期の古筆家（古文書の鑑定家）である古筆了珉（1645-1701）により、筆者を慈鎮和尚（慈円 1155-1225、新古今和歌集時代を代表する歌人の1人）と極められた『金葉和歌集』1冊は、伝藤原為家筆『金葉和歌集』とともに本学図書館所蔵資料の中でも最も早い時期の書写と目される古典籍の1つである。古筆鑑定の通例に漏れず本来の筆者は未詳であるが、六半本（正方形の本）に小粒の文字で書写された写本はその筆者を慈鎮と極められる（鑑定される）ことが多い。残念なことに完本ではなく途中20丁分を欠く。古写本は、書美の鑑賞のために一部が切り出され古筆切として軸装や折帖に仕立てられることもままあるが、現在のところ本書と関わる断簡の報告は聞かない。本文系統は比較的伝本の多い二度本であるが、注目されるのはその書写形態で、和歌1首を2行書きする際には上句（五七五）

と下句（七七）の間で改行されるのが通例であるが、本書はそうっていない。平安期の写本は句の途中で改行するものが多く、鎌倉時代の早い時期に書写された写本にこのような形が残ると考えられている。『金葉和歌集』の伝本中でも最も古いものの一つであり、他に例を見ない貴重な典籍と言える。

兩架番号I-13。〔鎌倉前期〕写1帖。装丁は列帖装。金茶巾繫地菊花文金欄表紙（16.1×15.3cm）。外題、左肩金泥で龍紋と霞を描く題簽「金葉和歌集」。料紙は鳥の子。首遊紙1丁、墨付134丁、尾遊紙1丁。毎半葉10行（和歌1首2行書）。内題「金葉和歌集 巻第一（～10）」。奥書無し。用字、漢字・平仮名。なお、本書は片岡智子教授の解題を付して福武書店から影印が刊行されている（『伝慈鎮筆 金葉和歌集』福武書店1984）。

（文学部准教授 海野圭介）